九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

感想

村山，七郎

https://doi.org/10.15017/2332756

出版情報：文學研究. 70, pp.5-10, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

感　想

村山七郎

九州大学文学部に四年間在職中、研究においても、教育においても、さしたることもしないうちに退官したのは汗顔のいたりです。その穴埋めに、というわけではありませんが、「文学研究」に感想でも書くようにともとめられて、筆をとることにしました。感想などはいたって不得手でありますから、今まで日本語系統論について諸学者が発表したことをふりかえり、この問題がどうなっているのかについて私なりの考えをのべておきたいと思います。

アルタイ言語学を学んだ私の興味は前から日本語の成立の問題にも向けられました。考えて見ればロシアの言語学者はスラヴ言語学に、ドイツの学者はゲルマン言語学に、フランスの学者はロマンス言語学に、そしてそれぞれ共通して印欧比較言語学に、フィンランド、ハンガリーの学者はウラル語族の研究に力をそそいでいますが、日本の言語学者ならばどういうことになるであろうか、と言えば、一億の話し手をもつ日本語（およびそれと系統関係を推測されるアルタイ諸語）の研究に力をそそぐということになるでしょう。上田万年、藤岡勝二、新村出、安藤正次、小倉進平、金田一京助、有坂秀世らの故人をはじめ、泉井久之助氏、服部四郎氏、河野六郎氏など、いずれも日本語の親族関係の研究に相当の力をそそぎました。橋本進吉や池上禎造氏、亀井孝氏らのよ

うな国語学者も間接に、この問題の究明に言語学者にまさるともおとらない貢献をしていることは、ひろくみとめられています。

それでは日本語の親族関係ないし成立の問題がこれらの学者の努力によってどれだけ解決されたか、と言えば「多くは解明されていない」と答えなければなりません。

明治のはじめ日本に滞在した英国人アストン（一八九七年）は日本語と朝鮮語とのある程度の親族関係を考えましたが、金沢庄三郎（一九一〇年の学位論文）になると、朝鮮語は日本語の分かれ枝であるという極論となり、大野晋氏（一九五七年）は橋本進吉の上代八母音説を考慮して日・鮮比較に新境地をきりひらこうとしましたが、その試みは所期の成功をおさめませんでした。現代において朝鮮語の最も深い知識をもつ河野六郎氏（一九七一年）は朝鮮語は日本語と同系とも同系でないともいえないのが現状である、という見解です。ついでながら、ラムステット、李基文氏（ソウル大学）の努力によって、朝鮮語とツングース・満洲語との関係はいくぶんあきらかにされました。藤岡・新村・小倉・金田一らのウラル・アルタイ説はどうかと見れば、タイポロジカルな類似点を指摘する域をあまり出ず、その説の学術的基礎づけは―新村にその試みがいくぶんあるのを除けば―ほとんど手がついていない有様です。そもそもウラル・アルタイ語族なるものが確立したものでないことを忘れてはなりません。服部四郎氏は漠然たるウラル・アルタイ説をとらず、氏の専門とするアルタイ諸語との親族関係の可能性を考えているようですが、その考えを積極的に証明するところまでは行きません。氏は厳密な比較方法を説きますが、それをアルタイ諸語との比較に適用して成果をあげるというところまで行っていません。ついでながらメイエの一九二四年の『史的言語学における比較方法』と服部氏の「比較方法」（一九七一年）とを比

較して、理論的にどれだけ進歩を示しているかを見るのも興味がありましょう。また氏の『日本語の系統』（一九五九年）の中の語彙統計学的考察が日本語系統問題の解明にとってどれほどの意義をもつかは私の疑問とするところです（語彙統計学は有力な学説となりえませんでしたが、今後、学説史的な興味からそれを研究しようとする方は、*Current Anthropology*, April 1962 の Knut Bergsland, Hans Vogt, On the validity of glottochronology や、J. Clauson の「アルタイ説の語彙統計学的評価」Voprosy Yazykoznaniya 1969. No. 5 および L.Ligeti の「アルタイ説と語彙統計学」、同誌 1971, No 3 さらに泉井久之助『言語の世界』一八五―二〇四ページを読む必要があります）。

泉井久之助氏の説については後にのべます。外国の学者のうちで最も光っているのは近代モンゴル学、アルタイ学の創始者G・J・ラムステット（一九一九―一九三〇年フィンランド代理大使として東京在住）と、おそらく外国の日本語研究家として最も偉大なE・D・ポリワーノフ（一八九一―一九三八。氏の東洋語研究者用言語学概論、レニングラード一九二八年、は日本の言語学界にきわめて大きな影響を与えました）でありましょう。二人ともアルタイ言語研究家として一流であり、後者は五つの日本方言を記述し、さらに南島（オーストロネシア又はマライ・ポリネシア）言語学にも通じていました。前者は一九二四年、在日中、「日本アジア協会報」に発表した論文のなかで日本語とアルタイ諸語との比較の方法について述べましたが、それは今日見ても立派なものです。ひとがもし古代日本語の音節がすべて母音終りであることや語頭に濁音が立たないという特徴がポリネシア諸語にも見られるばあい、それだけで日本語のポリネシア的基層を推定するならば、正しくないでしょう。ラムステットは日本語のこのような特徴が音韻変化の所産であると見られることを説いており、原始日本語では

閉音節もありえたこと、濁音が語頭に立ちえたことを述べますが、これに賛成せざるをえません。（他方、今日のポリネシア諸語の音韻諸特徴が歴史的所産であることは、インドネシア諸語と比較して見ればただちに明らかであります。）

ポリワーノフは一九一八、一九二四年に日本語の南島語的要素を指摘し、日本語はアルタイ的大陸的要素と南島語的要素から成る混合言語である、と説きました。いったい形態論が二つの異系統の言語に由来するところの混合言語がありうるでしょうか。メイエ（一九二四年）もブルームフィルド（『ランゲージ』二六―四）もその可能性を否定しませんが、現実はどこにも見つからないと述べています。しかし一九六〇年代に典型的な混合言語がコマンドルスキー群島に発見され、理論上のみならず、じっさいにも混合言語が存在するということになりポリワーノフ説を混合言語不可能のドグマからは否定できません。ポリワーノフ説はもっとも勝れていましたが、当時はアルタイ言語学も南島言語学も今日ほどではありませんでしたから彼の説は十分に展開されませんでした。また彼の説には誤りもふくまれています。

泉井久之助氏の日本語と南島語の比較（一九五二年）は日本語の南島的基層を究明しようとした日本人の最初の試みであります。氏以前、上記の日本の言語学者が南島語の研究をほとんど行っていないのは、他の国の言語学者の理解に苦しむところでありましょう（有名な満洲語文法をフランス語で書いたドイツのガーベレンツは大著『メラネシア諸語』を発表しました）。

他方、池上禎造氏（一九三二年。日本語の母音調和を有坂よりハッキリ述べた）、有坂秀世（一九三二、一九三四年）の研究は八世紀（げんみつにはそれよりやや前）の母音調和を解明するのに貢献しました。今では両氏

の発見した母音調和の形は原始アルタイ語のそれのくずれた形として説明するのが合理的です。

さらに日本語の動詞活用体系とツングース語のそれとの密接な関連も解明されつつあるように思われます。特に活用種類のうちで最も有力な四段活用の成立が明らかになりつつあるように思われます。それとともに四段活用は子音ステム活用である、という一部国語学者の説が必ずしも正しくない、と私は見ています。また日本語の存在動詞はアルタイ存在動詞と同源であるようです。

今後、日本語成立の研究は単なる音韻比較から、形態・音韻比較および形態論比較にすすむことは明らかであります。

近ごろアメリカのR・A・ミラー氏（ワシントン大学）が『日本語と他のアルタイ言語』という好著を出しました（シカゴ大学出版部、一九七一年、三三一ページ）。他方ソ連のN・A・セロミャトニコフ氏（モスクワの東洋学研究所員）が『古代日本語』（モスクワ、一九七二年、一七六ページ）を発表しました。前者はアルタイ比較言語学の見地から日本語の系統の問題をとりあつかい（音韻論、形態論）、後者の序論も古代日本語の起源をとりあつかっています。二人とも日本の重要な関係文献に目を通していて、しろうとの著述ではありません。ミラー氏はかってチベット・ビルマ系言語の研究者として知られ、現在はアメリカ随一の日本語学者として通り、近年はアルタイ言語学の研究をふかめております（氏は一九六七年、シカゴ大学出版部から、E・ハンプ編集の『言語の歴史と構造』シリーズのひとつとして『日本語』、四二八ページを出しました）。これはさいきん外国で出た日本語系統研究でもっとも本格的な研究であると言うことができますが、古代日本語にたいする氏の理解は十分でなく、語構成の分析に無理があります。また日本語の南島語的コンポネントに注意を払わないの

は、ポリワーノフ、泉井氏からの後退と言わなければなりませんが、今回の著書はアルタイ諸語との関係に研究を限ったのですからこの点はいたし方ないでしょう。ミラー氏が南島語的コンポネントの究明にたち向うことは時間の問題です。

セロミャトニコフ氏の研究の序論はたしかに興味をひきますが、音韻法則を無視するところがあり、多くの言語（その中にはエスキモー語も）から手当り次第、比較資料をもってくるというやり方は氏の議論の説得力を弱めます。南島諸語もひきあいに出すのはよいとして、南島祖語復元を問題としない点は問題であります。

しかし、日本語系統問題において、外国の学者ではこの二人が代表であって、私たちはこの二人の研究に相当の注意を払わなければなりません（ミラー氏の著書に対する私の書評は近く Monumenta Nipponica に発表されます）。

今こそ、日本の言語学者も、この問題と根本的にとりくまなければならないでしょう。